法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

類推ネットワーク・モデルを用いた日本語文法の変化に関する認知言語学的研究

尾谷, 昌則 / ODANI, Masanori

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
2016-06

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０２１１

研究課題名（和文）類推ネットワーク・モデルを用いた日本語文法の変化に関する認知言語学的研究

研究課題名（英文）Cognitive Approach to the Grammatical Changes in Moderen Japanese

研究代表者
尾谷　昌則（ODANI, Masanori）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：１０３８２６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年の日本語における文法変化について類推ネットワークモデルの観点から分析するため、昭和中期から後期にかけて出版された小説（主に文庫本、約700冊）をスキャンし、テキスト化して簡易コーパスを作成した。主に書き言葉であったため、口語の変化を研究するに十分なデータが得られたわけではなかったが、国会会議録検索システムなども併用しながら、接続助詞から接続詞化した「なので」や、「Ｖ＋ません」から「Ｖ＋ナイデス」への変化を中心に、様々な事例を研究した。

研究成果の概要（英文）：This study made a private corpus of modern Japanese by scanning the thexts of novels (called "bunko-bon") in order to investigate the grammatical changes of moderen Japanese. The amount of data is not enought to reveal the all aspects of changes, but using the minutes of National Congress together with our corpus, we could graspe the grammatical change of some expressions. For example, Japanese conjunctive particle "Node(=because)" and the demonstrative "sore(=it)" made a complex conjunction "sore-na-node(because of it)." But several years later, the new conjunction "Na-node" is created by dropping the demonstratives.

研究分野：日本語学

キーワード：言語変化　文法　意味　現代日本語

１．研究開始当初の背景

近年、「ことばの乱れ」があちこちで指摘され、批判されている。中でも、若者言葉に対する批判は多いが、それらは新しく生み出された語彙が多いため、物珍しく、注目を集めやすいだけである。しかし、それだけではなく、気づかないうちに進行している言語変化もある。

特に、文法的な変化は気づかれにくい。気づかれたとしても、単なる誤用として批判される場合が多いように見受けられる。中には無知ゆえの、恣意的な誤用もあるかもしれないが、母語話者が文法に関する誤用を頻発するとも考えにくいため、それらの新用法が全てが恣意的な誤用ではなく、中には言語学的に見て妥当な（もしくは一定の理解が得られる）文法の変化も少なからず含まれているはずである。

本研究では、そういった事例に光を当て、その変化の妥当性を認知言語学の観点から、特に類推ネットワークモデルを用いて、検証することが目的であった。

２．研究の目的

本研究では、近年進行しつつある言語変化（新語・流行語の類いではなく、文法に係わる変化）の中には、単なる恣意的な誤用として片付けるのではなく、言語学的に見て一定の理解が得られる妥当な変化であるということを示すことが主目的であった。

その目的を達成するための手段として、言語変化の実態を調査するためのコーパス（電子テキスト・データ・ベース）を独自に作成することも本研究の目的となった。そのデータを用い、近年観察された文法的変化の要因が語用論的な推論や類推に基づいていることを示し、その変遷過程について類推ネットワーク・モデルを用いて包括的に説明することが最終的な目的であった。

３．研究の方法

まず、言語変化の実態を調査するためのデータベース作りである。具体的には、近年（昭和中期～後期）の小説をスキャンし、テキスト化してデータベース（コーパス）を作成した。選定した小説は、スキャン作業が捗るように、サイズが一定のものを優先し、文庫本とした。研究予算の関係上、新品の書籍を購入することは難しいため、某大手古書チェーン店に依頼し、1 冊あたり 100～140 円で購入できる文庫本を選定した。また、新規な表現を積極的に取り入れている可能性が高いライトノベルと呼ばれる小説も、90 年代初等のものからなるべく多く選定し、データとして取り込んだ。

これらの小説を画像データとしてパソコンに取り込んで、テキスト認識（OCR 処理）を施した。OCR には市販のソフトを用いたが、文字の認識精度は（特殊な記号などを除けば）ほぼ 99%であった。ただし、ページ内には本文だけではなく、柱やノンブルなどもあるため、章タイトルやページ番号なども一緒にテキストとして読み取ってしまうという問題が生じた。画像データからそれらを外すためには、本文のみをトリミングするしかなく、その作業に予定外の時間を費やした。

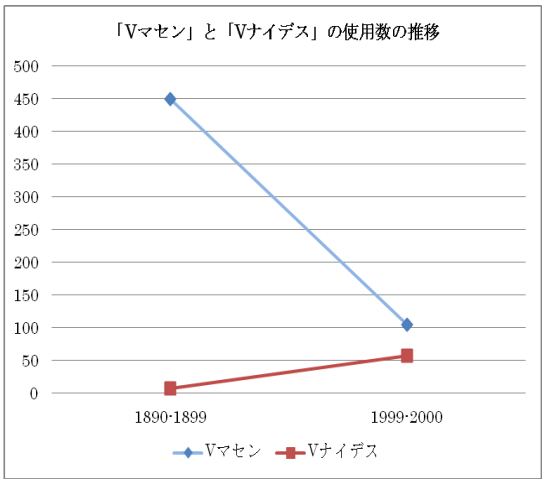
テキストデータ化したものは、初出年で 10 年ごとのフォルダにまとめて整理し、KWIK Finder などのソフトを使用して検索した。

４．研究成果

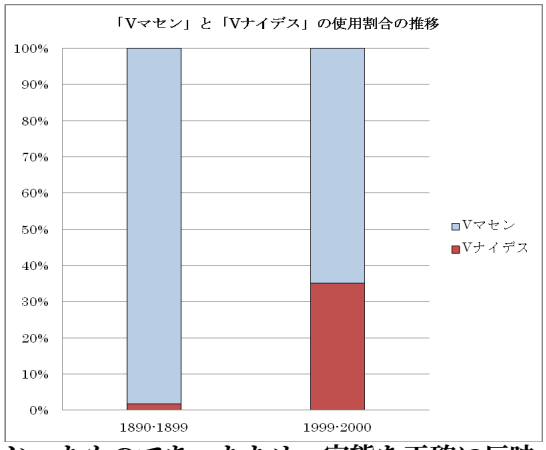
(1)　小説を約 700 冊スキャンした簡易コーパスは、画像としてスキャンした小説をＯＣＲソフトでテキストデータ化しただけのものであるが、研究に支障がない程度の認識率で文字認識でいた。1970 年～2001 年までの約 30 年分を収集しているが、90 年～01 年にはライトノベルと呼ばれる小説も 100 冊ほど入っており、口語表現を大いに反映したデータが収集できた。しかし、著作権があるものばかりのため、本研究で作成したコーパスは残念ながら一般公開できない。また、今回は文庫化された小説からテキストを収集したため、生きた口語表現は少なく、「なので」のようなややくだけた表現の使用例を十分に収集できなかったという反省点がある。

(2)　「Ｖマセン」から「Ｖナイデス」への変化については、後者が出現し始めたと思われる明治期のデータとの比較を試みた。具体的には、1890 年代に初出の小説データを青空文庫からダウンロードしたものを用いた。

その使用数の推移を見てみると、「Ｖマセン」の使用が急激に減少している一夫で、「Ｖナイデス」の使用数が（非常にゆるやかではあるが）増えていることが分かる。まだ使用率が逆転していないとはいえ、長期的に見て、いずれは「Ｖナイデス」が主流となりそうな勢いである。



使用の実数ではなく、使用の割合で比較したものが次のグラフである。こちらを見ると、両表現の使用割合の差が大きく縮まってきたことが分かる。ただし、今回比較したデータは、文語的な文章と口語的な文章が入り混



じったものであったため、実態を正確に反映しているとは言い難い。口語と文語を分けて調査するなど、今後さらに詳細な調査が必要であると思われる。

述語内の文法カテゴリーの配列を、「V＋丁寧＋否定」から「V＋否定＋丁寧」への組み替えと考えられるが、単なる文法構造の変化だけではなく、その背後には（後ですする「なので」とも連動するが）フォーマルな丁寧形からカジュアルな丁寧形へと変化しつつあるのではないかと指摘した。

(3) 接続詞化した「なので」については、2000年頃からこれを言葉の乱れであるかのように指摘する新聞記事が見られるようになったため、その 90 年代後半から一般での使用が増えたものと考えられる。記事の中には、①若者が頻繁に使用しており、②大学生のレポートでも（つまり書き言葉としても）使用されるようになった、との指摘があったが、国会会議録で調査したところ、1966 年に 1 例の使用が見られ、70 年代、80 年代にもわずか 1 例ずつではあるが使用されているため、決して若者だけが使用する表現ではないことが分かった。

さらに、新聞記事の中でも、小学生の作文を掲載するコーナーで、90 年代の作文中に何件か「なので」の使用が見られたため、大人だけではなく、子供（児童）の間でも使用されていたものと思われる。ただし、児童の作文は、丁寧な表現を使用しなければならないことを児童なりに強く意識した文体であり、「なので」が書き言葉として児童期から学習・定着している実態が浮かび上がった。

では、なぜこのような「なので」が出現したのか。本研究で調査したところ、「なので」が出現するよりも前に、指示語付きの「それなので」の使用が見つかった。1951 年に 2 件、1959 年に 1 件、1964 年に 1 件である。

以上のことから、先に述べた内容を指示詞の「それ」で受け、「それなので」という形での使用が先に生じ、その後に「それ」が省略され、「なので」だけが残ったため、現在のように「なので」があたかも独立した接続詞のように使用されるようになったと考えられる。つまり、接続助詞として使用されていた時は、「彼は賢いので、～～だ」と使用されていたのだが、それが指示詞によって代用され、「彼は賢い。それなので～～だ。」となり、そこから「それ」が省略されて「彼は賢い。なので～～だ。」へと変化したものと考えられる。

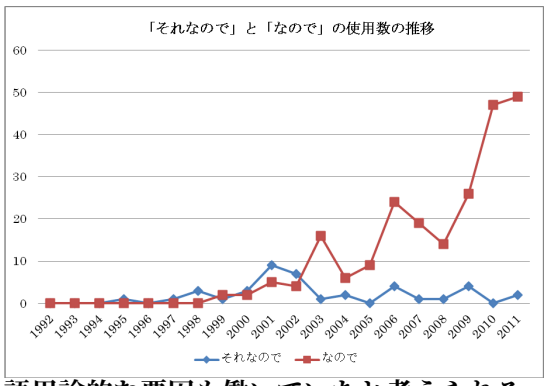
上記のように、併用されていた指示詞が省略されることで、独立した接続詞になったと考えられる例は、「（それ）なら、俺も行く。」などが指摘されている（山梨正明著『認知文法論』ひつじ書房、1995 年）。そのため、付属語の接続助詞が自立語化して接続詞へ変化する過程において、指示詞の省略という一般性の高い言語現象が存在する可能性が極めて高く、「なので」も決して恣意的な言語変化などではなく、そういった接続詞化の一例として位置づけられるべきものであることが判明した。

ただし、「それなので」も「なので」も、発生当初の使用事例は非常に少ない。この時期は、まだ話し言葉としての印象が強かったためであろうか、今回の調査で収集した資料では、「なので」の発生および変化の過程を解明するに十分なデータを収集したとは言い難く、今後、口語資料に基づいた調査がさらに必要であると思われる。

盛んに使用されるようになったのは 2000 年以降であるが、その様子は国会会議録の発言データからも見て取れる。2000 年前後の使

用事例の推移を見てみると、やはり先に示したように、「それなので」の使用事例が先に増加し、そのあとを追うようにして省略形の「なので」の使用が増加しているが、「なので」の使用数が多くなると、相対的に古い形式である「それなので」の使用は低下している。

また、何に文法構造の変化だけではなく、



語用論的な要因も働いていたと考えられる。「ですから」や「ですので」などはフォーマルな丁寧形であり、基本的には、相手を遠ざけるネガティブポライトネスとなる。しかし、丁寧さを維持しながら、相手との親密関係をアピールするポジティブポライトネスを意識して、「なので」というカジュアルな丁寧表現が生み出されたと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計３件）

① 東森勲・柏本吉章・塩田英子・村田和代・米倉陽子・尾谷昌則、朝倉書店、『対話表現とコミュニケーション』、2016 年（予定）、ページ数未定

② 加藤重広・滝浦真人・澤田淳・天野みどり・山泉実・呉泰均・尾谷昌則 他、ひつじ書房、『日本語語用論フォーラム１』、2015 年、26（pp.183-208.）

③ 児玉一宏・小山哲春・深田智・仲本康一郎・尾谷昌則 他、ひつじ書房、『言語の創発と身体性』、2013 年、13（pp.236-248）

６．研究組織
(1)研究代表者
尾谷　昌則（ODANI, Masanori）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：１０３８２６５７